

若年者(22才)の尿管腫瘍例

京都大学医学部泌尿器科学教室

加 藤 篤 二
岡 部 達 士 郎
伊 藤 坦CARCINOMA OF THE URETER SEEN IN A YOUTH:
REPORT OF CASE

Tokuji KATO, Tatsushiro OKABE and Hitoshi Iro

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 22-year-old man was admitted because of hydronephrosis of the left kidney due to obstruction at the upper end of the ureter. He had flank pain but never seen gross hematuria. On exploration, there was no aberrant vessels constricting the ureteropelvic junction. Palpation of the obstructed area revealed no stone.

On making a longitudinal incision on the ureter, a papillary tumor protruded. Nephroureterectomy was performed. This is the first reported case of ureteral carcinoma seen in the third decade.

はじめに

血尿症状を全く欠き、22才という若年者に発した珍しい尿管腫瘍の1例を記載する。

症 例

患者：22才の男子，初診1971.12.18.

主訴：左腰痛。

個人歴：特記すべきものはない。

現病歴：10年来左腰痛を訴え当時蛋白尿を指摘されたことがある。4年前発熱，嘔気，腎部疼痛のため某泌尿器科を訪れたところ，左水腎症の診断を下されたという。その後は症状が緩和したために放置していたが，1971年12月初旬より全身倦怠が強いため来院した。発病来血尿は全くない。

所見：体格中等度，貧血なく，胸部に変化なく腹部で左腎は1横指，右腎はふれず，膀胱部，外陰部に異常はないが，左睪丸はソケイ部にあり小。レ線像で尿路には結石を認めず，排泄性撮影で右腎像は正常なるも左腎盂腎杯は中等度に拡張して水腎像を呈し，逆行性撮影で右腎に変化なく，左尿管上部に狭窄があり，上端が図のごとく拡張して不規則な陰影を示し，腎盂

に造影剤が上行せず (Fig. 1)，DIP で右腎に異常はないが，左腎盂下端 (L₃) が鋭く欠損し，これと併用した大動脈撮影で欠損部血管の異常はない (Fig. 2)。尿はほぼ清澄，蛋白(-)，赤血球(-)，白血球(-)，上皮(+)，結晶(+)。血液像で赤血球数500万，白血球数6600，ヘマトクリット46%，出血時間3分，凝固時間8分，血圧120/50，胸部レ線像で肺野に陳旧石灰像がある。

以上の所見により左尿管上部のレ線陰性結石がいちおう疑われたが，欠損像が不規則である点，腫瘍の存在も考えられたので1972年2月15日手術を施行した。手術時左腎盂，尿管移行部に限局性腫脹を認めたが，結石の硬さを触知せず，また異常血管の絞扼も認められなかったので，試みに腫脹尿管部に縦切開を加えたところ，乳頭状腫瘍の出現をみたので直ちに縫合，左腎と尿管の全摘除をおこなった。摘出標本重量は190g，断面を加えると腎は軽度水腎像を呈し，腎盂下端より約3cmの部に狭窄ありこの部にえんどう大のやわらかい乳頭状有茎の腫瘍がみられ深部への浸潤もなく，また結石も認められなかった (Fig. 3)。腫瘍の組織所見はⅡ～Ⅲ度の移行上皮癌であった (Fig. 4, 5)。なお，手術時左ソケイ部睪丸を同時に摘出した。



Fig. 1

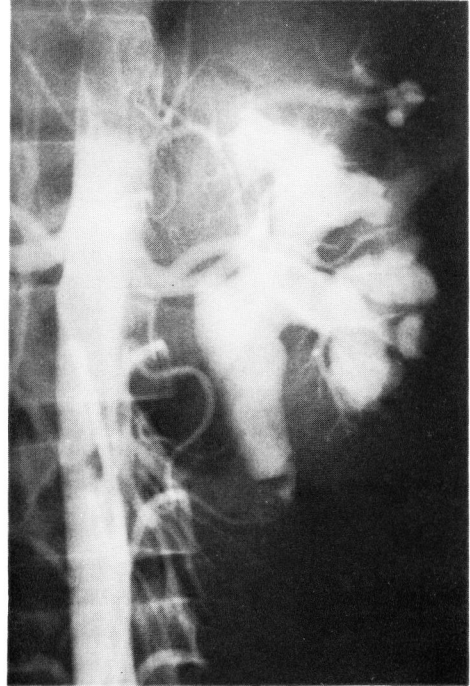


Fig. 2

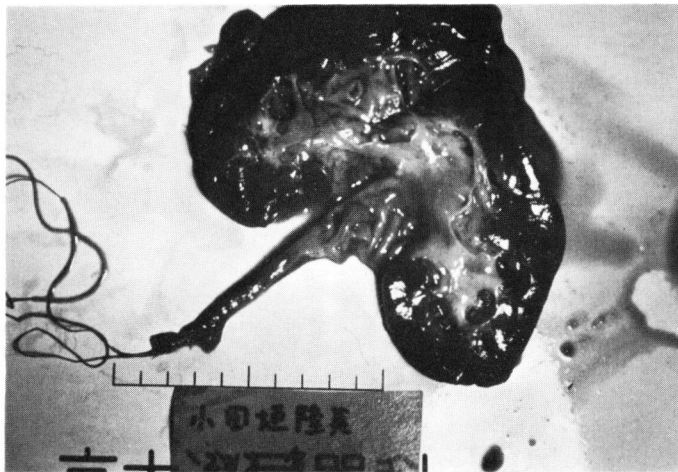


Fig. 3

む す び

本邦の原発性尿管腫瘍は良性、悪性とも戦後急速に増加して1969年安藤の報告によると231例の多きに達し、さらに1972年永田らは30例を集めている。京大においても北山らは1962年17例を報じているが、その後の経験例は現在まで約10例およんでいる。いずれも男子に多く年令的分布も諸家の報告と大差はない。すなわち男女とも60才代が最も多く、ついで50才代、70才

代となり海外のそれと類似している。このうち比較的若年者に発した例はScott によると最少4才となっているが、本邦では今までの報告によると荒木の37才の男、行徳の35才の男、京大北山の33才の男、などが代表的であるが、1943年岩下の集めた統計によると最年少は椎名の21才の男（乳頭腫）、高橋の22才の男（線維粘液腫）、川越の22才の女（線維筋腫）、小沢の23才の女（血管粘液腫）があげられている。爾来現在まで

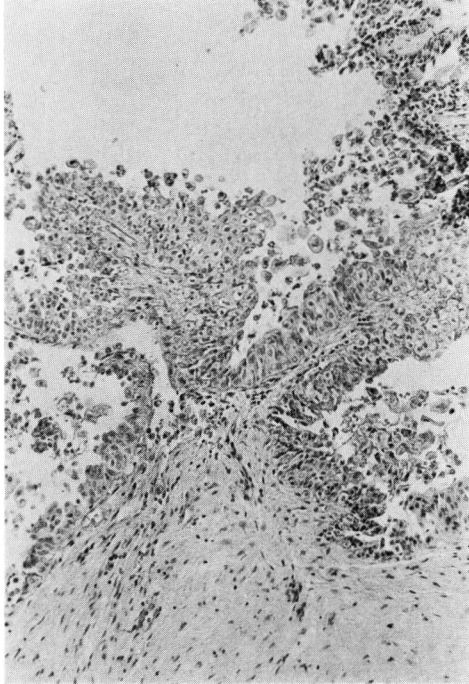


Fig. 4

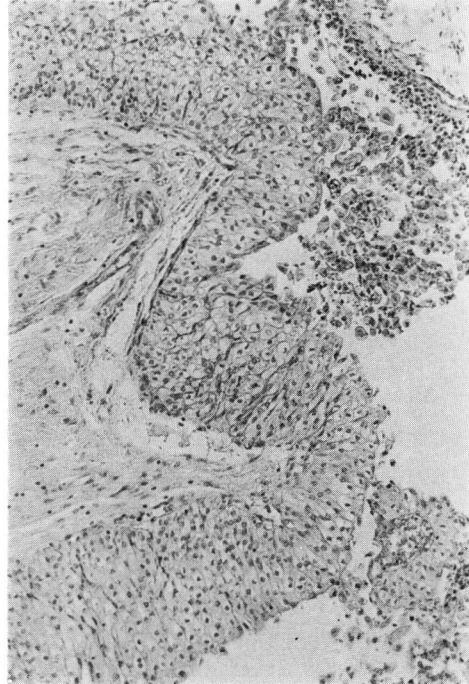


Fig. 5

20才代以下の報告は小川の23才の女（脂肪粘液腫）と加藤らの20才未満の2例以外は発見されていない。本症例も22才という文献生まれな若年者で既往に血尿を全く欠いている点より、むしろ結石が疑われたが、レ線像および手術所見により乳頭状腫瘍が確認せられた。

参 考 文 献

- 1) 岩下：日泌尿会誌，**296**：34，1943.
 - 2) 岩崎・ほか：日泌尿会誌，**227**：42，1951.
 - 3) 小田・ほか：皮と泌，**474**：19，1957.
 - 4) 西尾・ほか：皮と泌，**23**：22，1960.
 - 5) 北山・ほか：泌尿紀要，**119**：13，1967.
 - 6) 安藤・ほか：泌尿紀要，**647**：23，1969.
 - 7) 永田・ほか：日泌尿会誌，**237**：63，1972.
 - 8) 加藤・ほか：泌尿紀要，**91**：11，1965.
 - 9) 小川・ほか：日泌尿会誌，**311**：61，1970.
- （1972年5月2日超特別掲載受付）
- この症例は 1972年5月20日 第59回 関西地方会（和歌山市）で報告した。